



リウマチ疾患・膠原病の 専門診療を実践

当科は、関西圏の大学病院では数少ない膠原病を専門とする内科系診療科であり、近畿一円における膠原病・リウマチ性疾患についての診療および患者教育を行っている。膠原病は多臓器を障害する全身疾患であるため、他科と積極的に連携を取り、総合的な診療を行っている。当科では多くの基礎研究の成果を診療に還元することを目標としているが、その中でも特異的かつ感度の高い自己抗体検出法(RNA免疫沈降法)をルーチンに用いて、診断・治療法の選択・予後の推定に役立っている。当科の特徴として、以下の2点が挙げられる。

- ① 診断・治療に難渋する全身性自己免疫疾患・リウマチ性疾患の診療
- ② 自己抗体による診断と新たな病型分類による治療法の開発

代表的診療対象疾患

関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、混合性結合組織病、強皮症、皮膚筋炎・多発性筋炎、シェーグレン症候群、血管炎症候群(高安動脈炎、肉芽腫性多発血管炎、結節性多発動脈炎など)、成人スティル病、ベーチェット病、抗リン脂質抗体症候群、リウマチ性多発筋痛症、IgG4関連疾患など

診療体制と治療実績

外来診療体制と実績

月曜日から金曜日の週5日間、免疫・膠原病内科外来を開き、連日3～4診体制で外来診療を行っている。また、別に初診外来を置き、初診患者のより詳しい病歴聴取と待ち時間の軽減を図っている。全身性自己免疫疾患・リウマチ性疾患を専門とする西日本では数少ない内科系診療科であるため、専門診療を頼り近隣府県から紹介されて来院する患者さんも多く、外来患者数は年々増加の一途をたどり、現在1日平均110人の外来患者を診察している。

入院診療体制と実績

32床で病棟業務を遂行しているが、近畿圏内の患者数からすれば決して多くはなく、病床は常に稼働率90%を超える状態である。研修医、中間指導医(大学院生、医員)、指導医(教員)の3人主治医体制で入院診療を行っている。カンファレンス/教授回診を週2回行うことで、重症患

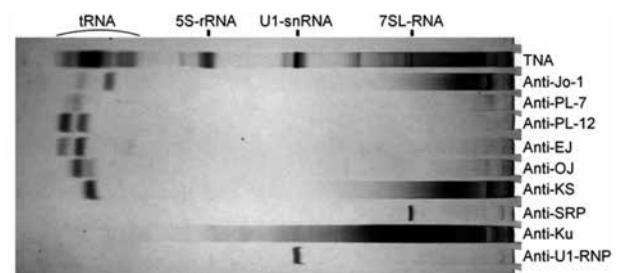
者や病態の変化している患者さんに遅れることなく治療方針決定を行っている。2012年度も年間入院患者は300人を超えている。疾患の性質上、診断と治療に時間を要することが少なくないため、平均在院日数は一般に長く、26.0日である。



高度先進医療の取り組み

独自開発の自己抗体解析を活用

全身性自己免疫疾患・リウマチ性疾患の診断において、疾患特異的の自己抗体は診断・病型分類および疾患活動性評価に有用な場合が少なくない。当科では独自に開発したRNA免疫沈降法および蛋白免疫沈降法を用いた自己抗体の解析を行い、種々の疾患の診断の補助・病型分類・予後の推定・治療方針の決定に役立っている。特に炎症性筋疾患の診断や予後・合併症予測に自己抗体の同定は極めて有用で、急速に進行する間質性肺炎の治療方針決定や悪性腫瘍の合併症予測には有用であるため、他病院からも多数検査依頼がある。



RNA免疫沈降法による自己抗体の解析